

条件表現形式「限り」の文法記述*

北 澤 尚

国語・国文学**

(2000年9月29日受理)

1. はじめに

現代日本語の条件表現については、近年、研究が著しく進展している。かつては、「～ば」「～たら」「～と」「～なら」の四種の形式に分析が集中していたが、最近では、そのほかの形式についても意味・用法の記述が盛んになってきている。本稿で取りあげる「限り」という形式も、条件表現としての用法があり、その文法的なふるまい方は複雑で独自の特徴が見られる。そこで、本稿では、条件表現形式としての「限り」がどのような構文で用いられ、かつ、そのつどどのような意味を表すのか、できるだけ精密に記述してみようと思う。(以上の目的から、「三月三十一日限りで会社をやめる」「パスは三回限りだ」のような、時間や回数を表す名詞に下接する用法や、「あらん限り」のような文語形式の慣用表現は分析の対象としない。)その方法としては、近代・現代の小説作品から採集した用例にもとづいて、包括的かつ明示的な分類を試みる。用例は、新潮社『新潮文庫 明治の文豪』『新潮文庫 大正の文豪』『新潮文庫の100冊』のCD-ROMを使用し検索した文例が中心である。また、議論に支障のない範囲で用例の本文の表記を改めた箇所がある。

なお、ここで特に、「限り」に関する先行研究として、森田良行(1989)と中山栄治(1997)の内容にふれておく。まず、森田良行(1989)では「限り」を、以下の①～④の四つの用法に分けている。① 名詞として「空間、時間、さらには抽象的な事柄の限界」を表す。「限りなく広がる大海原」「欲を言えば限りがない」② 名詞および接尾語として「可能な限度いっぱい」を表す。「私の承知しているかぎりでは、そのようなことはございません」「見渡すかぎりは桜の花」③ 述語について、その状況のみに条件を限定すること。「……であるかぎり……だ」「……しないかぎり……だ」の文型をとる。「プロであるかぎり出場資格は認められません」「戦争が続くかぎり平和は期待できない」のように肯定形に付けば現実の状況、「雨が降らないかぎり運動会は中止されない」「病気でないかぎり学校へは行くべきだ」のように否定形に付けば仮定的な状況となる。④ 数詞および時など期限を持つ語、数量概念を含む名詞について「許容の限度」を表す。「公演は今週かぎりで打ち切りとなりました」「特売品は現品かぎり」——ただし、この森田(1989)の①の名詞用法と④の接尾語の用法については、上述したように本稿では考察の対象としない。

次に、中山英治(1997)は、従属節の事態内容から、「～限り」I(予定的用法)、「～限り」II(既定的用法)、「～限り」III(仮定的用法)の三種類に分類する。本稿の分析の内容とも関わるので、この三分類を少し詳しく紹介する。

- ・ 「～限り」Iの用法は、「ある範囲を差し出して、その範囲までを主節事態生起の条件とする」用法である。(1 a お金が続く限り、僕は切手を集める。 1 b *お金が続いた限り、僕は切手を集めた。)この1 a と1 b からわかるように、この用法には「過去の一時点の既定事実は述べられない」という特徴がある。また、(2 イラク側が国連決議に対する違反を続ける限り、米英仏軍はイラクを徹底攻撃する意思を

* Grammatical description on Japanese conditional form “kagiri”: Takashi KITAZAWA (Department of Japanese Language and Literature) (Received September 29, 2000)

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

明確にしておき、) の例の「限り」は、「～内は」「～の間は」と置きかえることができ、「～限り」Iは「ある時間的な範囲をその先にある限界を意識して差し出している」と中山(1997)は指摘する。事態の事実性が明確なので、中山(1997)は、この「～限り」Iを「予定的用法」ともよんでいる。前接する動詞群は「続く系の動詞、いる／ある等の存在動詞、できる」が圧倒的に多いという。

- ・ 「～限り」IIの用法は、「主節事態の事態認識(判断)の契機としてのある範囲を限定する」用法である。(3 「概要」を見る限り、あまり説得力はない。)「～限り」Iとは異なり、この「～限り」IIでは「限り」の後にデハが接続可能であるという。また、従属節の事態は過去の一時点における事態でも、現在の時点のものでもよい。しかし、「～限り」Iのような、ある先のことや、予定のことは設定できない。つまり、「～限り」IIの用法は、「従属節事態が常に既定的であるということが言える」と中山(1997)は述べる。前接する動詞群は知覚動詞が最も多いという。
- ・ 「～限り」IIIの用法は、「主節事態生起の唯一の条件を仮定的に差し出す」用法である。(4 この構造そのものを見直さない限り、教育をめぐる国民の苦しみは軽減されないだろう。)のように、「～ない限り～ない」構文をとる。この構文が仮定的な条件設定をするのは、「事態の実現の可能性が低い事柄を主節事態の条件とするのであるから、事実的な設定は難しく、仮定的に差し出すほうが理にかなっている」からであると、中山(1997)は述べている。

2. 「～ない限り」について

2.0 前章で紹介した森田(1989)と中山(1997)を比較してみると、どちらも「～ない限り、～」のように、「限り」の前に否定の「ない」が付くときには仮定条件になると解釈している点は同じである。しかし、今回採集した多くの実例を見ると、「～ない限り、～」という複文が常に単なる仮定条件だけを表しているかどうかについて疑問が生じる。そこで、本章では、この否定形述語に「限り」が付いた「～ない限り、～」(以下、「～ない限り」と略す)という構文をとりあげ、考察する。(形容詞の「ない」も含めて論じる。)

以下、本稿独自の立場から「～ない限り」を「～ない限り」Aから「～ない限り」Dまでの四種類に下位分類する。なお、「～ない限り」などの分析にあたって、たとえば「薬を飲まない限り、この病気は治らない」という文を例にとれば、「薬を飲む」の部分で「p」とよび、「この病気は治る」の部分で「q」とよぶことがある。そうすると、この文は「pナイ限り、qナイ」と表すことができる。つまり、従属節と主節それぞれの肯定命題の部分で「p」「q」とよぶのである。さらに、「薬を飲まない」の部分で「前件」、「この病気は治らない」の部分で「後件」とよぶこともある。

2.1 「～ない限り」A

まず、「～ない限り」Aは、反事実的な仮想を表す用法である。

- (1) 人の力をもって過去の事実を消すことのできない限り、人は到底運命の力よりのがるることはできないでしょう。(国木田独歩「運命論者」)
- (2) 登美子が生き返らない限り、証人はどこにもいない。(石川達三「青春の蹉跎」)

上の(1)(2)を、「pナイ限り、qナイ」と形式化すると、文例(1)の「過去の事実を消すことができる」や、文例(2)の「登美子が生き返る」というpの事態は、現実には生起する可能性がまったくあり得ず、事実と反する事態である。そして、この反事実的な事態が成立すると仮想すれば、qとして「運命の力よりのがるることはできる」(文例1)、「証人がいる」(文例2)ことになる。しかし、現実には反事実的な事態が実現する可能性はゼロであるから、主節の「到底運命の力よりのがるることはできない」、「証人はどこにもいない」という話し手の否定的判断が強調されるという表現効果が生まれるのである。

さらに、この「～ない限り」Aは、「～でも(し)ない限り、～ない」のように、「でも」を用いた文型で使われることもある。

- (3) 翼でもないかぎり、安田はその時刻に北海道に行けぬ。(松本清張「点と線」)
- (4) これを原料としてモルヒネを製造したのでは、魔法でも使わない限り、外国品とたちうちのできる価格の商品を作れるわけがない。(星新一「人民は弱し官吏は強し」)

なぜ、このように「～ない限り」Aがとりたて詞の「でも」と共起しやすいかといえ、この場合の「でも」は極端な例または特殊な例を示しており、また一方、成立する可能性が全くない「反事実」も極端かつ特殊な例示であるからである。もちろん、上の(3)(4)では、次の(3)(4)のように、pが仮に成立するなら、論理的に、その帰結としてqが成立することになる。

(3) 翼があれば、安田はその時刻に北海道に行ける。

(4) 魔法を使えば、外国品とたちうちのできる価格の商品を作れる。

しかし、(3)(4)のような仮想的な事態は、pの反事実性ゆえに夢にすぎず、それゆえ、qという帰結も決して実現しないことが自明なのである。「～ない限り」Aでは、命題qに対する否定的判断を強調するために、qが成立するために不可欠な条件がpのような現実には実現不可能な事態しかあり得ない、と修辭的に述べているのである。

2. 2 「～ない限り」B

次に「～ない限り」Bは、例外的な事項を表す用法である。

(5) 貴様が何をしようと僕が何をしようと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互いの自由です。(幸田露伴「運命論者」)

(6) 何事に限らず、うちの者の方から御相談を願わないかぎりは、彼らのしたいようにさせておいて頂きます。(里見弴「多情仏心」)

(5)(6)は、「他人に害を及ぼす」「うちの者の方から御相談を願う」という事態が起きる場合を除外すれば、後件が成立することを意味する。

(7) 病気でない限り死ぬまで仕事をするのが人間の義務だ。(国木田独步「二老人」)

(8) 村民は五木の厳禁を犯さないかぎり、意のままに明山を跋渉して、雑木を伐採したり薪炭の材料を集めたりすることができた。(島崎藤村「夜明け前」)

(9) 今後の情報に特に変化のないかぎり、艦船攻撃は真珠湾に集中する。(北杜夫「楡家の人びと」)

そして、この「～ない限り」Bの文は、上の(5)(6)(7)のように、前件の行為や事態に対して、後件では話し手の主張や判断などが含まれることが多い。よって、後件は肯定形になりやすい傾向がある。また、(5)(6)のように「限り」に「は」が付いた形でも用いられる。用例には実際には「は」がついていない、文例(7)(8)(9)も「限りは」にすることができる。

また、次の(10)(11)(12)の「限りは」「場合は」に置き換えても、ほとんど意味は変わらない。なお、2. 1の「～ない限り」Aは、「～ない限り」Bとちがって、「～ない場合」に置き換えることはできない。

(10) 必要のない 限りは／場合は、兄の日々の戸外生活について決して研究しないのである。(夏目漱石「それから」)

(11) 女の話が出ると、にやりになり笑ってのり気になって来るが、それが出ない 限りは／場合は、一時間でも、二時間でも黙っていて、それに飽きた時は、どんな用談があっても、かまわず平気で失敬する。(岩野泡鳴「放浪」)

(12) はいりたての小僧は、たいていは裏の用か、^{したじやく}下職への使いときまっているが、用のない 限りは／場合は、店にすわっていて、だんだんに商売のほうを見ならってゆかなければならない。(山本有三「路傍の石」)

さらに、次の(13)(14)のように、「よほどの……が～ない限り」の文型が用いられることもある。

(13) この階に住んでいるのはほとんどが独身者で、よほどの例外的な事情がないかぎり、平日の昼間はほとんど誰もいなくなってしまうのだ。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

(14) 連絡手は空襲中でも、よほどの危険が迫らぬかぎり、持場を放棄するわけにはいかない。(三浦哲郎「驢馬」)

このように、「～ない限り」Bは、前件のpが成立する場合を例外として、通常は後件は成立することを表す。よって、仮に前件(従属節)を削除して、その代わりに「一般に」「原則として」「普段は」などの連用修飾表現を補えば、後件(主節)だけでも文脈上、文意を伝達することができる点で、「～ない限り」Aの用法と似ている。

2. 3 「～ない限り」C

「～ない限り」Cは「誘導推論」を表す用法である。まず、日常言語における「誘導推論」(invited inference)とはどのようなものかについて、下の(15)の文例によって説明する。

- (15) 内藤と裕見子だけならどうにでもなる。だが、二ヵ月後には子供が生まれてくるのだ。働かないかぎり, その出産の費用すら工面がつかない。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

「働かない」(～p)なら、「出産の費用すら工面がつかない」(～q)という条件文は、日常的な推論として、「働く」(p)なら、「出産の費用の工面がつく(だろう)」(q)を含意していると理解されやすい。

- (16) 働かないかぎり, 出産の費用の工面がつかない (～pナラバ～q)

- (16) 働くなら, 出産の費用の工面がつく (pナラバq)

日常言語では、(16)の文に接すると、会話の含意として(16)を喚起しやすい。そのような現象を「誘導推論」とよぶのである。もちろん、論理学では、(16)が真であっても(16)は常に真であるとは限らないが。

- (17) 登美子の産んだ孫は、江藤が認知しない限り, 江藤の姓を名乗ることもできないし、江藤の財産を相続する権利もない。(石川達三「青春の蹉跎」)

- (18) わたしの信ずるところによれば、グッドセンスを持たない限り, 如何なる幸福も得ることはできない。(芥川龍之介「侏儒の言葉」)

上の(17)(18)も、「誘導推論」の操作によって、下の(17)(18)と言い換えることができる。

- (17) 登美子の産んだ孫は、江藤が認知すれば、江藤の姓を名乗ることもできるし、江藤の財産を相続する権利もある。

- (18) わたしの信ずるところによれば、グッドセンスを持てば、如何なる幸福も得ることはできる。

つまり、「～ない限り」Cは、「～ない限り」Aや「～ない限り」Bとちがって、前件を削除して後件だけでその表現意図を伝えることは不可能である。この点が、「～ない限り」Aや「～ない限り」Bと、「～ない限り」Cとのきわだったちがいである。

2. 4 「～ない限り」D

「～ない限り」Dは、過去の限定的な事態を表す用法である。

- (19) よそよそしい空気がふたりの間を流れていた。北村がしゃべらないかぎり, 加藤はいつまでも黙っていた。(新田次郎「孤高の人」)

たとえば、上の(19)の例では、北村がしゃべりだせば、相手の加藤も口をひらくことが予想される。ただし、この場合、「～ない限り」Aのような反事実的な仮想を表す用法とちがって、(19)の「しゃべる」というpは、反現実的であるわけではない。また、「～ない限り」Bのpは例外的な事項を表すが、(19)のpは一回的な出来事を表しており、「例外」とも言えない。さらに、「～ない限り」Cの誘導推論のような、「～pナラバ～q」に対する「pナラバq」という含意を考えることもむずかしい。

このように(19)の例は、これまで見てきた「～ない限り」A、「～ない限り」B、「～ない限り」Cとはまったく異なるふるまいをする。これは、主節の文末にタ形をとり、過去の一回的な出来事を表しているためであると考えられる。今、便宜的に、この(19)の用法を「過去の限定的な事態」の用法とよぶことにする。なお、下の(20)(21)(22)の文例も、(19)と同様に、主節の文末がタ形でおわり、従属節「～ない限り」によって、ある過去の出来事を限定的な出来事として描きだしている。また、この「～ない限り」Dの特徴として、「～ない限り、～した」を「～するまでは、～した」に置き換えることができる点が注目される。これは、これまでの「～ない限り」Aから「～ない限り」Cにはなかった特徴である。

- (20) 内心の要求上是非ともそれを解決しなければならぬ彼は、実験の機会が彼に与えられない限り, 頭の中で徒らに考へなければならなかった。(夏目漱石「明暗」)

- (21) 第一事がそこまで切迫して来ない限り, 彼は相談に応ずる必要を毫も認めなかった。(夏目漱石「明暗」)

- (22) 私にしたところが、仕事を再開しないかぎり, 手元に残っている僅かな金でこしはばらくは喰いつないでいなくてはならない身だった。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

以上、2.1から2.4で論じた、「～ない限り」Aから「～ない限り」Dまでの特徴を、ここで一覧表にして示すと、次の表1のようになる。

表1

	前件の省略可能性	～pナラバ～q に対応する pナラバq の実現可能性	「場合は」 との置換	「までは」 との置換	主節の文末の 「タ」形
ない限りA	○	×	×	×	×
ない限りB	△	△	○	×	△
ない限りC	×	○	△	×	×
ない限りD	×	×	×	○	○

3. 「～肯定形+限り」について

3.0 前章での考察の結果、否定形述語に「限り」が下接した「～ない限り」には様々な意味・用法があり、従来の「仮定条件を表す」といった単純な説明では不十分であることがわかった。同様に、本章では、肯定形述語に「限り」が下接した「～る／～た限り、～」「～ている／～ていた限り、～」「名詞+である限り、～」の構文を取りあげ、意味・用法のちがいに応じていくつかのタイプに分類できることを主張する。「～肯定形+限り、～」（以下、「～限り」と略す）について、ここで結論を先にいうと、次の三種類に分類できることがわかった。

- ・「～限り」E……範囲の用法
- ・「～限り」F……事実的用法
- ・「～限り」G……予定的用法

3.1 「～限り」E

まず第一に、「～限り」Eは「範囲」を表す。この用法では、「(名詞+の+) 動詞述語+限り」という構文が用いられる。次の(23)(24)のように視野の範囲を表す用例と、(25)(26)のように「力」の範囲を表す用例が多い。

(23) 月曜日の昼さがりの川原はみわたすかぎり日光と葦と水にみちていた。(開高健「裸の王様」)

(24) 見わたす限り何もかもが白だ。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

(25) 彼は脚力の及ぶ限り帰途を急いだ。(長塚節「土」)

(26) いくらかでも寒さから逃れるためには、でき得るかぎり、自分の身体を丸く小さくおさめることが必要だった。(新田次郎「孤高の人」)

上の(23)(24)の「見わたす限り」は視野の範囲を表現しているが、この用法ではその他に「目の及ぶ」「眼に入る」「眺めている」「眼の届く」「見晴らす」などが「限り」の上接語として実例の採集ができた。そして、その場合、主節は一般に(23)のような自然現象か、(24)のような状態の表現であり、どちらも無意志的な表現である。なお、この「視野の範囲」を表す用例では、「限り」の後ろに「では」がつかないのが特徴である。

次に、(27)(28)の文例を見てみよう。

(27) 向う岸は又一座の山の裾で、頂の方は真暗だが、山の端から其山腹を射る月の光に照し出された辺りからは大石小石、榮螺のようなの、六尺角に切出したの、剣のようなのやら、鞠の形をしたのやら、目の届く限り残らず岩で、次第に大きく水にひたつたのは唯小山のよう、(泉鏡花「高野聖」)

(28) 半蔵の代になって苦心して書物を集めることは、何十年來の彼の仕事の一つと言ってもよかったが、殊に万葉は彼の愛する古い歌集で、それに関する文献は彼の手の届くかぎり集められるだけ集めてある。(島崎藤村「夜明け前」)

(27)の「限り」には「目の届く」が、(28)の「限り」には「手の届く」が上接している。(27)は物理的な視野の到達する範囲を表している。(28)は同じ「届く」という動詞を使っている点で形式的には(27)とよく似ているが、(28)の「手の届く限り」は物理的な「手」の到達する「範囲」を表しており、本来の用法から派生した用法である。(28)は文脈上、次の(29)～(31)にみられる物理的な「力」の「範囲」の用法と意味的に隣接している。

- (29) 咳が出る、食欲が進まない、熱が高まるという始末である。しのは力の及ぶ限り、医者にも見せたり、買い薬もしたり、いろいろ養生に手を尽くした。(芥川龍之介「おしの」)
- (30) とにかく私の力の及ぶ限り、御対面だけはなされるように御取り計らい申しませう。(芥川龍之介「邪宗門」)
- (31) 稲草を以て田の空地を埋めることが一日でも速やかなればそれだけ余計な報酬を晩秋の収穫において与えるからと教えて自然は百姓の体力の及ぶ限り活動せしめる。(長塚節「土」)
- また、物理的な「力」の及ぶ範囲とは、物理的に可能な範囲を指すのであるから次のような文例も存在する。
- (32) 『アパッチ砦』や『黄色いリボン』や『幌馬車』や『リオ・グランデの砦』に出てくるベン・ジョンソンの乗馬シーンを私はできる限り頭の中に思い浮かべた。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)
- (33) しかし私は、必ず清高を、たとえ完全ではなくとも、出来うる限り普通の人と同じ能力にまで近づけさせ、ちゃんと自分で働ける人間に育ててみせます。(曾野綾子「太郎物語 (高校編)」)
- (34) お種は自分の経験から割出して、どうすれば男というものの機嫌が取れるか、どうすれば他の女が防げるか、そういう女としての魂胆を——彼女が考え得るかぎり事細かに嫁の豊世に伝えようと思った。(島崎藤村「家」)
- (35) そしてその代わりに哲学や文学の書物を買うことにした。それを時間の得られる限り読んだのである。(森鷗外「妄想」)

つまり、以上の意味的な連関に注目して派生の過程をまとめると、

・視野の範囲(23)(24)(27) → ・力の範囲(25)(28)~(31) → ・可能の範囲(26)(32)~(35)

というように、矢印で示すことができる。

ところで、最初の「視野の範囲」は物理的な状況としての視野であったが、さらに抽象化して「知覚・認識の範囲」を表す用例も「限り」にはある。

- (36) だが、内藤のこのトレーニング姿を見るかぎりでは、彼が夜の商売に逆戻りしてしまったことは明らかだった。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)
- (37) 俺は、貧相な男が一番嫌いだ。その次は酒癖の悪い男だ。だが一度逢って自分の目で見た限りでは、勝沼壮一郎という男は、そのどちらも持ち合わせていないという気がした。(宮本輝「錦繡」)
- (38) でもね、俺が見ていたかぎりでは、あんな大差の判定が下される試合ではなかったと思うんだ。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)
- (39) 少なくとも、私が大戸との試験の当日に見かけた船橋ジムの関係者の態度から判断するかぎりでは、彼らが内藤のためにあえて危険な賭をする覚悟を持っているとは思えなかった。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)
- これら(36)~(39)の「見る」「見た」「見ていた」「判断する」に特徴的なのは、(36)「見る」、(37)「見た」、(38)「見ていた」でわかるように、「限り」の直上語のテンス・アスペクトがスル形だけでなく、シタ形やシテイタ形などに分化して使われる点である。また、「視野の範囲」の用例には見られなかった「~限りでは」の形が頻繁に用いられる。

さらに、「認識」の延長上には表現主体自身の「経験」を表す用例が見いだせる。次の(40)~(44)である。

- (40) 純粹の木唄では無論ないが、自分の知ってる限りでは、まあ木唄と云うのが一番近い様に思われる。(夏目漱石「坑夫」)
- (41) 鴉が餌をくわえるや、たちまち楔が外れ、蓋が落ち、同時にまわりの砂がどっと崩れて、鴉はすっぱり生き埋めになる……二、三度、実験してみた限りでは、まず申し分なかった……羽ばたく暇もなく、ずるずると砂に吸い込まれていく哀れな鴉の姿が目に見えるようだった。(安部公房「砂の女」)
- (42) 僕の読んだ限りでは、トイレに全部、水のホースがついてるんです。それで洗うんです。(曾野綾子「太郎物語 (大学編)」)
- (43) 私のかかわった限りではこのレベルで記号士の侵入を受けた例は一度もありません。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)
- (44) 何でも私の覚えております限りでは、若殿様が十五六の御年に、もう御二方の間には、御不和の芽がふいていたように御見受け申しませう。(芥川龍之介「邪宗門」)

上の(40)は、表現主体（「自分」）の知識の範囲という限定である。(41)(42)(43)は表現主体の経験の範囲という限定である。さらに、(44)は表現主体（「私」）の記憶の範囲という限定である。これらについても先ほどと同様に意味の派生の過程を矢印で示すと、次のようになる。

・視野の範囲(23)(24)(27) → ・知覚・認識の範囲(36)～(39) → ・知識・経験・記憶の範囲(40)～(44)

また、この「～限り」Eは、「～内は」「～間は」「～なら」「～ので」と置き換えることはできない。

3. 2 「～限り」F

次に、「事実的用法」を表す「～限り」Fを見ていく。ここで「事実的用法」というのは「仮定的用法」と対立する用法である。この「事実的用法」には二種類あり、一つは「一般的事実」の用法であり、もう一つは「個別的事実」の用法である。

まず、「一般的事実」の用法から見ていく。ここで言う「一般的事実」の用法とは次のようなものである。

(45) そんなことは一度だけじゃなかった。羊の群れに犬がついているかぎり、どんな犬でもバスに向かって疾走してきたよ。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

(46) たとえば毎日庭を掃いたり、風呂を燃しつけたりしている限りは、唯一人として権助が権助であることに異をたてるものはない。(里見弴「多情仏心」)

(45)の例では「一度だけじゃなかった」、(46)の例では「毎日」という表現がそれぞれの文脈で使われていることから分かるように、これらは一回のみ生じた事実ではなく、反復的に生起している。次の(47)(48)(49)には、上の(45)(46)のような反復を表す語句は使われていないが、文脈によって、幾度も多回的に主節の行為がくり返されたことは明らかである。

(47) 食堂も作り、星は社にいる限り、昼食はそこでとった。(星新一「人民は弱し官吏は強し」)

(48) 遅刻欠席早退をしないで通学しているかぎり母は安心しており、モット勉強シナサイとか予習復習ハチヤントヤッテルノとか、世の母親ならだれでも言いそうなことをただの一度も口にしたことはありません。(倉橋由美子「聖少女」)

(49) 婦人雑誌を交換して読むくらいしか、この村の人との間にそういう友情はなく、後は全く孤立して読んでいた。選択もなく、さほどの理解もなく、宿屋の客間などでも小説本や雑誌を見つける限り、借りて読むという風であるが、(川端康成「雪国」)

なお、これら(45)～(49)の「～限り」は、条件表現「～すれば」「～すると」と置き換え可能である点が特徴的である。

また、「一般的事実」の用例の中には、正確に言えば「一般的判断」を表す例も含まれる。次の(50)(51)がそれである。

(50) みんな心というものがある限り、同じ人間なのだよ。(三浦綾子「塩狩峠」)

(51) 肉体がある限り、人間の思考や感情は肉体を離れて存在し得ないということを七瀬は思い知った。(筒井康隆「エディプスの恋人」)

この「一般的判断」の用法では、「～限り」は「～するからには」と置き換えが可能である。

次に、「個別的事実」の用法とは、次のような例である。

(52) けれども自分の秘密がこの人達に隠してあるかぎり、長い留守の間の事で言い出し得ることはほとんど少なかった。(島崎藤村「新生」)

(53) だが、すでに竣工予定日が決定している限りかれらは、どのようにしてもその日までに完成させなければならない義務を負わされたのである。(吉村昭「戦艦武蔵」)

(54) 太郎は十二月の講義があらかた終っても、青木辰彦の高校の授業がある限り、それとなく、名古屋に残っていた。(曾野綾子「太郎物語(大学編)」)

これら(52)～(54)の例についても、「～限り」と置き換えが可能な条件表現をさがすと、それは「～するの」になるのではないかと考えられる。以上をまとめると

- ・ 一般的事実……「～と」「～ば」と置換可能
- ・ 一般的判断……「～からには」と置換可能
- ・ 個別的事実……「～ので」と置換可能

のようになり、この三種類の用法は、こまかな意味的差異を持ちつつ、前件と後件の間にある種の因果関係が認められる点が共通している。

3.3 「～限り」G

最後に、「～限り」の三番目の用法である、「～限り」Gについて考える。結論を先に言うと、この用法は第一章で紹介した中山栄治 (1997) の、いわゆる「～限り」I (予定的用法) にはほぼ該当すると考えられる。この用法で特徴的なのは、主節の事態が成立する条件として、「～限り」が時間的な幅を設定して限定している点にある。そのために、この「～限り」Gは、「～する内は」「～する間は」と置き換えることができる。この点についてはすでに中山英治 (1997) に指摘があるが、今回採集した実例では次のようなものがある。

(55) 無縁坂上に実在している物が、依然実在している限りは、蔭口やら壁訴訟やらの絶えることはない。(森鷗外「雁」)

(56) それだからいやしくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなかりろうと思えます。(夏目漱石「吾輩は猫である」)

(57) 「さまよへる猶太人」を取扱った文献の数は、非常に多い。自分がそれを悉く読破すると云う事は、少くとも日本にいる限り、全く不可能な事である。(芥川龍之介「さまよへる猶太人」)

(58) おれは銭のつづく限りやるんだ。(夏目漱石「坊っちゃん」)

「～限り」に上接する述語に注目すると、この「～限り」Gでは、(55)「実在している」、(56)「存在する」、(57)「いる」、(58)「つづく」などが使われている。中山栄治 (1997) は、この「～限り」G (中山1997では「～限り」I) では「前接する動詞群は、『続く』系の動詞、『いる／ある』系の存在動詞が圧倒的に多い」と述べている。(なお、中山1997はその他に「できる」という動詞も多いと指摘しているが、「できる限り」は本稿では「～限り」Eに含めている。)

また、この「～限り」Gは、すでに中山 (1997) に言及があるように、主節成立のための時間的な幅を設定するという性格上、前件では過去に一時的に生じた出来事を表現することはできない。たとえば、先の(58)を「*おれは銭のつづいた限り、やるんだ」のように言いかえることはできない。むしろ、「～限り」Gの前件には、次の(59)(60)の例のように、動きの継続や結果の状態を示すテイル形が用いられやすい。

(59) なぜならこの聖域の中でも祭壇はもっとも神聖なもので、たとえ誰であろうとそこに近づくことはできないから、そこに隠れている限り絶対に捕まる心配はないの。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

(60) この音波を発信している限り、連中は私たちからおおよそ十五メートル以内には近づけないの。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

4. まとめ

以上、第2章と第3章の考察を通して、条件表現形式としての「限り」には、「～ない限り」Aから「～限り」Gまでの7種類の意味・用法があることを明らかにした。

- ・「～ない限り」A……反事実的な仮想を表す
- ・「～ない限り」B……例外的な事項を表す
- ・「～ない限り」C……誘導推論を表す
- ・「～ない限り」D……過去の限定的な事態を表す
- ・「～限り」E……範囲(視野、力、可能、知覚・認識、知識・経験・記憶などの範囲)を表す
- ・「～限り」F……一般的事実・一般的判断・個別的事実を表す
- ・「～限り」G……時間的に限定された予定・予想を表す

その結果、否定形述語に「限り」が付いた「～ない限り、～」は、森田良行 (1989) や中山栄治 (1997) が論じるような、単なる「仮定条件」を表わすのではなく、むしろ、本稿で考察したように「反事実的な仮想」「例外的な事項」「誘導推論」「過去の限定的な事態」の四種の用法に分類できることがわかった。また、肯定形述語に「限り」が付いた「～限り、～」についても、中山 (1997) の「予定的用法」と「既定的用法」という

二分類では不十分であり、本稿の「～限り」Eの「範囲の用法」を加えて三分類すべきであると考えられる。なお、本稿では、「限り」の諸用法をきめ細かく分類し記述することに重点をおいたため、A～Gの用法の相互の関連性や「限り」の中核的な意味の抽出については論が及んでいない。それらの点についてはさらに考察を深めていきたい。

参考文献

- 赤塚紀子・坪本篤朗（1998）『モダリティと発話行為』日英語比較選書3 研究社出版
遠藤 織枝（1984）「～からは／～からには」『日本語学』10月号 明治書院
坂原 茂（1985）『日常言語の推論』認知科学選書2 東京大学出版会
塩入 すみ（1995）「カラとカラニハ」『日本語類義表現の文法（下）複文編』所収 くろしお出版
中山 英治（1996）「現代日本語における条件表現の拡張的な形式をめぐって」京都教育大学修士論文
———（1997）『「限り」とその周辺』国語学会平成9年度春季大会要旨集
仁田 義雄（1984）「条件づけとその周辺」『日本語学』9月号 明治書院
前田 直子（1991）「条件文分類の一考察」『日本語学科年報』13 東京外国語大学
益岡 隆志編（1995）『日本語の条件表現』くろしお出版
———（1997）『複文』新日本語文法選書2 くろしお出版
宮島達夫・仁田義雄編（1996）『日本語類義表現の文法（下）複文編』くろしお出版
森田 良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク出版
山梨 正明（1994）「条件文の表現機能と言葉の認識」『日本語学』8月号 明治書院

附記 用例の採集に関しては、陳玉玲（1998年度東京学芸大学大学院修士課程修了）の協力があった。記して感謝する。

